

対話論ノート（1）

天野 雅郎

思索の根本的な形式は対話である。—— 三木清『人生論ノート』

1

対話とは、そもそも何か。この漢語（→中国語）を、まず和語（→日本語）として読もうとすると、その訓読を前にして私たちが立ち止まらざるをえないことから、本稿は話を始めたい。言い換えれば、もともと「対話」は漢語であり、これを漢音で「タイワ」と読もうが、あるいは呉音で「ツイワ」と読もうが、いずれにしても和語ではない。と言うことは、この語を現在のように多くの日本人が、あたりまえに日本語として使い、そのことに関して、まったく違和感も不審感も抱いていない辺りに、どうやら私たちと「対話」との付き合い辛さの根源は隠されているらしい。ちなみに、正確に表記すれば漢音では、この語は「カイカイ」と読むべきであろうし、同様に呉音では、この語は「ツイエ」と読むべきであろう。したがって、この語を「タイワ」と読むのは日本人の、あくまで慣用音に過ぎないことも、私たちは踏まえ、わきまえておくべきであったに違いないのである。

◆34

要するに、単刀直入に「対話」とは、日本語ではない。いや、つい100年前までは日本語ではなかった、と言い換えるべきであろうか。論より証拠、例えば今から140年ばかり前（明治十四年→1881年）に、はじめて私たちの国に登場した哲学辞典（『哲學字彙』）の中で、この「対話」という語が現在、その原語（original＝起源）としている dialogue には「問答」という訳語が宛がわれているし、これは3年後（明治十七年→1884年）の『改訂増補・哲學字彙』に至っても、まったく事情は同一である。そして、この dialogue に対して最初に、上記の「問答」や、これを引っ繰り返した「答問」と並んで、言ってみれば、第三の訳語として「対話」（→對話）が付け加わるのは、ちょうど私たちの国の年号が明治から大正へと切り替わる、その直前の明治四十五年（1912年）に刊行された『英獨佛和・哲學字彙』の段階であり、それは厳密に言うと、今を遡る107年前のことである。

ともあれ、私たちが「対話」について、あれこれ頭を捻る折に、この類の基礎的な、歴史的な事実を蔑ろにすることは許されないし、また、このようにして

「対話」が日本語を使い、これを読み、書き、話し、聴くことを日常的に繰り返している人間（すなわち、日本人）にとっては、かなり経験の乏しい、その内容や方法の不明な行為であることを、さしあたり私たちは理解しておく必要がある。裏を返せば、そのような正体不明の、よく訳の分からない行為を、目下、私たちは様々な機会に、ことあるごとに要請され、その要請に応じないことには、二進（にっち）も三進（さっち）も行かない窮地に追い込まれているのが実情なのではあるまいか。それならば、そのような窮地が何故、私たちの身边に生じ、これを無視することも回避することも、できかねる状況に私たちは投げ出されているのか、それを当面、私たち自身の焦眉の課題として、直視するのが急務であろう。

ちなみに、そのような「対話」の「対」（漢音→タイ、呉音→ツイ）の字は、もともと「旧字は對に作り、𡗗（さく）と土と寸とに従う」と、例えば白川静（しらかわ・しずか）の『字統』には記されており、はなはだ「教養」の語の成り立ちとも深い縁（音読→エン、訓読→ふち）で結ばれていたことが分かる。それと言うのも、その際の「𡗗は掘鑿（くっさく）などをする器で、上に齒状の刻みをつけたものであるが、土を撲（う）つときにも用いる。寸は又で〔、〕これをもつこと。𡗗をもって土を撲つことを對という。いわゆる版築（はんちく）などの作業である」と説かれていて、実は現在、翻れば日本語で「教養」と呼ばれている語の淵源も、これを遡ると英語の「カルチャー」（culture）にまで辿り着く訳であるから、その点を踏まえれば、この語の原義も耕作（cultivation）であったことになり、土（呉音→ツ、漢音→ト、訓読→つち）と繋がる語であった点は変わらない。

35♦

なお、いささか細かい、重箱の隅を楊枝で穿るような話となり、恐縮であるが、このような話を逆に、うまく俎上に載せることが難しい所に、そのまま昨今の私たちの「教養」の不足や、有り体に言えば、その欠如は如実に代弁されているのでもある。その意味において、あえて白川静の『字統』の引用を続けると、先刻の「版築は城壁を作るとき、挾板（きょうばん）の中に土を盛り、これを棒状のもので突き固める方法」であり、このような「版築のとき相向うて土を撲つなど〔、〕作業のしかたから生じた意味であろうと思われる」語に、例えば「対言・相對・対等」というときの「対」があるのではなかろうか、と白川静は述べている。と言うことは、そのような「対」の使い方の一つに、目下、本稿が扱っている「対話」という語は、まず位置づけられうるであろうし、その上に、なおかつ本稿のタイトルともなっている「対話論」も、成り立ちうるものであったはずな

のである。

2

さて、以上の点を踏まえて、さしあたり『日本国語大辞典』の「対話」の語釈を紹介しておく、そこには「直接に向かい合って互いに話をする。また、その話。多くは二人の場合にいう。対談」と記されていて、いかにも陳腐な語釈と見なされかねない一文が置かれている。が、ここには存外、今の私たちが忘れ、見失ってしまったであろう、重要な「対話」の一面が潜められているのではあるまいか。なにしろ、この語が漢語では中国の元代の詩人で、いわゆる色目人（＝イスラム教徒）である、薩都刺（サツ・トラ）の詩（「夜泊釣台詩」）に典拠が置かれている点を始め、この語は私たちの国でも室町時代の禅僧、季弘大叔（きこう・だいしゅく）の日記（『蔗軒日録』）に姿を見せ、さらに、この語は徳富蘆花（とくとみ・ろか）の『思出（おもひで）の記』の中で、次のように用いられていたからである。——「外国人などとは一度も対話したことの無い僕であるから……」

◆36

徳富蘆花の『思出の記』については、後に再度、立ち返ることになるので、この場では簡単な導入（イントロダクション）に留めておくが、この小説が明治三十年代を代表するベスト・セラーであったことや、また「近代日本文学には数少ない教養小説」（『近代文学名作事典』）であったことは、ここで再確認しておくべきであろうし、何よりも、その際の「教養」とは「個人の内的充足と近代社会の健全な発展とが〔、〕おのずから統一される原点」において成り立つものであり、それゆえ、それが当時の「立身出世主義自体を〔、〕けっして否定していない」（同上）という点は見逃されてはならない。その点、この小説が19世紀と20世紀の、ちょうど分岐点（1900年→1901年）に当たり、これを跨ぐ形で『國民新聞』に連載され、言ってみれば、20世紀がスタートを切ると共に公刊され、大きな人気（popularity＝通俗性）を博したことは、現在の私たちにとっても印象的であろう。

なぜなら、このような「立身出世」（success in life）や、それを信じ、崇める「立身出世主義」（careerism）が、そのまま「教養」と通じ合ったり、重なり合ったりしている状態から、結果的に現在の私たちは遠く離れた地点に立たされている、と見なさざるをえないのであって、例えば先刻、引用した一節のごとく、いたって素朴（ナイーヴ）に「外国人」との「対話力」（すなわち、英語

力)を「教養」として捉え、そこに「個人」(＝欲望充足)と「社会」(＝経済発展)との「統一」を夢見ることが、かなり困難な、それどころか、ほとんど不可能な段階に私たちは辿り着いているからである。その意味において、この小説の筆を徳富蘆花が執っていた時点と、今の私たち(すなわち、21世紀の日本人)との間に起きた、さまざまな事件や出来事を振り返ることが、実は日本語の「教養」の歴史や、その類語(シノニム)でもある「対話」の機能を考えることに他ならない。

このような視点に立てば、前掲の『日本国語大辞典』の「対話」の用例が、ことごとく日本史上の、それどころか世界史上の特徴的な分節点において発せられたものであったことは、もっと顧みられて然るべきであろう。事実、この「対話」という語の典拠に挙げられている、薩都刺が元来、そのルーツを遡ると西域に辿り着く点は興味深い。当時は、このようにして多くのイスラム教徒が中国に移り住み、支配階級のモンゴル人に次ぐ地位を占め、いわゆる漢人(＝華北人)と南人(＝江南人)を制圧する立場にあった訳である。なおかつ、この薩都刺という詩人の場合、中国の官吏登用試験制度である「科挙」に合格し、進士の位を得ているから、その「対話力」も折り紙つきであったはず。ちなみに、その生没年は伝未詳であるが、ほぼ彼の生涯は元が中国を支配した、1271年から1368年の間に収まるようであって、私たちの国で言うと、鎌倉時代から室町時代に当たっている。

37♦

したがって、これを日本の側から振り返れば、そこに元寇(文永の役→1274年、弘安の役→1281年)を置き、さらに南北朝時代(1336年～1392年)を潜り抜ければ、もう『蔗軒日録』(しゃけん・にちろく)の筆者、季弘大叔の生年(1421年)までは一世代である。そして、この禅僧が没年(1487年)に至るまでの三年を過ごした、大坂(→大阪)の堺の海会寺(かいえじ)での日常生活を、その名の通りの日録(ダイアリー)として書き留めたのが『蔗軒日録』であり、そこには室町時代の都市住民の自治組織である、あの会合衆(えごうしゅう→かいごうしゅう)が最初に私たちの国で記録に留められているし、ここでも「対話力」という点で注目すべきは、彼のような禅僧が当時の「日明貿易」に際して果たした、重要な役割であろう。なお、季弘大叔の『蔗軒日録』に「大唐帰朝之船」として登場するのは、文明十六年(1484年)派遣の「遣明船」の帰国の際の記録である。

このようにして辿り直すと、これまで私たちの国が幾度か、と言うよりも、幾度も、いわゆる「外国人」(『思出の記』)との「対話」を必要とする時代を経て、今に至っていることは歴然としているし、そのような時代に私たちの衣・食・住を始めとして、まさしく全生活の転換期(ターニング・ポイント)が重なっていることも、火を見るよりも明らかであろう。そして、そのような転換期の最たるものに、先刻来の徳富蘆花の生涯も嵌め込まれている。その点、彼が明治元年(1868年)に生まれて、没したのは昭和二年(1927年)であることも、私たちは記憶に留めて然るべきであろう。すなわち、彼の生年から数えて、ちょうど150年後の現在を、私たちは生きており、また、さらに彼の没年の直前からスタートを切った「昭和」という時代は、やがて私たちに取り返しの付かない、悲惨な言語不通の状態を押し付け、その甚大な負債をも、背負わせることになったのである。

なお、ここで少々、徳富蘆花の生涯に触れておくと、彼が『思出の記』の中で使っている「対話」の用例は、その来歴に即して言えば、いたって古いものであろうし、そうであるからこそ、これを『日本国語大辞典』も典拠に挙げているのであろうが、その成り立ちを顧みると、すでに彼が郷里の熊本で、兄の蘇峰(そほう)こと徳富猪一郎(とくとみ・いいちろう)ともども、いわゆる「熊本バンド」に連なる面々の一人であったことは、おそらく私たちの国の「対話」の語誌を振り返る際、見逃されてはならない点ではあるまいか。なぜなら、このようにして日本語の「対話」の起源には、どうやら今の私たちが忘れてしまい、想起しにくいことさえ容易ではなくなっている、キリスト教(=プロテスタンティズム)との深い繋がりや、それが現実には、どのような影響を日本人の学校教育の場に、とりわけ語学教育の場に及ぼしているのかの、理解の鍵が潜められているからである。

事実、この「熊本バンド」(band=結盟)の拠点である、熊本洋学校が僅か、足掛け6年(明治四年~明治九年)で閉鎖された後、その多くの生徒が転学をしたのは京都の、同志社英学校(→同志社大学)であり、ここに蘇峰と蘆花の徳富兄弟も、相次いで籍を置くことになる。この間の経緯は『思出の記』の中では、わざわざ関西学院(→関西学院大学)に、その名を改められ、その舞台も神戸へと置き換えられてはいるが、この小説の主人公(菊池慎太郎)の重要な、人格形成(Bildung=教養)の場となっていることに変わりはない。

ちなみに、この当時の洋学校の授業は、ことごとく英語で行なわれ、その点、洋学校は英学校の別名に他ならなかった。しかも、そこには徳富兄弟の姉である、後の湯浅初子（ゆあさ・はつこ）等も通い、日本最初の男女共学が営まれていたのは注目に値する。

ところで、このようにして徳富蘆花が明治九年（1876年）の年頭、やがて8月には廃校となる、熊本洋学校に入学をするのは数えの9歳の時であるが、この頃の私たちの国の教育事情や、ひいては学問事情を知るためには、その名の通りの『学問のすゝめ』から、福澤諭吉（ふくざわ・ゆきち）の「人望論」を引くのが好都合であろうし、この「人望論」が『学問のすゝめ』の最終編（十七編）として刊行されるのは、ちょうど同年のことでもあった。そして、そこで福澤諭吉は「対話」という語自体を、用いてはいないものの、ほとんど「対話」という語や、ひいては「教養」という語と通じ合い、重なり合う形で、次のような主張をしているので、ご一読を。なお、ここで彼が「交際」（＝人間交際）と称しているのは、結果的に現在、私たちが「社会」と呼んでいる、その原語（オリジナル）の society の「翻訳語」（柳父章『翻訳語成立事情』）として、彼が考案したものである。

39•

人に交わらんとするには童（ただ）に旧友を忘れざるのみならず、兼ねてまた新友を求めざるべからず。人類〔、〕相接せざれば互いに〔、〕その意を尽すこと能わず、意を尽すこと能わざれば〔、〕その人物を知る由なし。〔中略〕人を知り人に知らるるの始原は多く〔、〕この辺に在りて存するものなり。〔中略〕人類多しと雖（いえ）ども鬼にも非ず蛇にも非ず、殊更に我を害せんとする悪敵はなきものなり。恐れ憚（はばか）るところなく、心事を丸出して颯々（さっさ）と応接すべし。故に交わりを広くするの要は〔、〕この心事を成（な）る丈（た）け沢山にして、多芸多能〔、〕一色に偏せず、様々の方向に由（よ）って人に接するに在り。〔中略〕世界の土地は広く〔、〕人間の交際は繁多にして、三、五尾の鮒（ふな）が井中（せいちゅう）に日月（じつげつ）を消（しょう）するとは少しく趣きを異にするものなり。人にして人を毛嫌いするなかれ。

と、このような命令文によって『学問のすゝめ』は閉じられているが、それは端的に、そもそも「毛嫌い」とは「鳥獣が、相手の毛なみによって好ききらいをすること」（『日本国語大辞典』）を指し示していたからに他ならない。が、そのような「毛嫌い」が遺憾ながら、人間同士が「はっきりした理由もなく、ただ感

情的にきらうこと。わけもなくきらうこと」(同上)へと転意しているのが、実は当時の日本の、国内外の共通の情勢であった。そして、このような言い回しで福澤諭吉の訴えていたことは、おそらく現在、150年後の日本人(すなわち、私たち)が寸分、違わぬほどの類似性で、そのまま直面している事態でもあって、その点、今でも『学問のすゝめ』は私たちの、同時代的(コンテンポラリー)な必読書(マスト・ブック)に挙げられて然るべきであろう。ただし、そこには福澤諭吉自身の「転回」(鹿野政直『福澤諭吉』)というアキレス腱が、隠されているけれども。

4

さて、このようにして時計の針を巻き戻すと、いわゆる「対話」が二人の人間(ニンゲン→呉音)によって、また、それ以上の人間によって、その人間(ジンカン→漢音)に放っておいても姿を見せる、いたって自然(ナチュラル)な行為であるかのように誤解し、錯覚している状態から、まず私たちは解き放たれる必要があるし、このような行為は原理的に、まず二人(もしくは、それ以上)の人間が対面し、対等の関係に立ち、それぞれに「対話」を交し合う条件が整わない限り、成り立ちえない事態であることを理解する必要がある。事実、そのような事態が近年に至るまで、それどころか近年に至っても、なかなか私たちの国では生まれ、育まれなかったから、これまた福澤諭吉は『学問のすゝめ』(十二編)の「演説の法を勧むるの説」の中で、まさしく一から、その「演説」や「談話」や、要は「人に向かって言を述べる」ことの重要性を訴えざるをえなかったのもあった。

◆40

なお、このようにして「演説」という語を事も無げに、今の私たちは使い、この語の画期的(エポック・メイキング)な役割を、まるで見失ってしまっているけれども、この語は漢語の場合、もともと「文字でなく、声音によって道理や教義、また意義などを述べ、説くこと。説明すること」(『日本国語大辞典』)を意味しており、これが現在のように「多くの人の前で自分の主義、主張や意見を述べること」(同上)を指し示すようになるのは、この語が英語の speech の翻訳語に宛がわれてからのことであって、そこには江戸時代の「蘭学」から明治時代の「英学」へと及ぶ、私たちの国の「洋学」の歴史が畳み込まれている。そして、そのために身を以て、この語を用い、そのための機会(=演説会)や施設(=演説館)を慶應義塾の中に作ったのが、福澤諭吉その人であった訳であり、その間の経緯は『学問のすゝめ』の以下の叙述からも、容易に窺い知ることが出

来るであろう。

演説とは英語にて「スピーチ」と言い、大勢の人を介して説を述べ、席上にて我思うところを人に伝うるの法なり。我国には古（いにしえ）より〔、〕その法あるを聞かず、寺院の説法などは先（ま）ず〔、〕この類なるべし。西洋諸国にては演説の法〔、〕最も盛んにして、政府の議院、学者の集会、商人の会社、市民の寄合より、冠婚葬祭、開業開店等の細事に至るまでも、僅（わずか）に十数名の人を会することあれば、必ず〔、〕その会につき、或いは会したる趣意を述べ、或いは人々〔、〕平生の持論を吐き、或いは即席の思付（おもいつき）を説きて、衆客に披露（ひろう）するの風あり。この法の大切なるは固（もと）より論をまたず。譬（たと）えば今〔、〕世間にて議院などの説あれども、仮令（たと）い院を開くも第一に説を述ぶるの法あらざれば、議院も〔、〕その用をなさざるべし。

裏を返せば、それまで私たちの国には原理的に、政治的にも経済的にも、社会的にも文化的にも、このような「演説」や、あるいは「談話」の成り立ちうる余地がなく、言ってみれば、私たちの国は「対話」の存在しない国であったことになる。そして、それが福澤諭吉をして、あの「天は人の上に人を造らず〔、〕人の下に人を造らずと言えり……」の冒頭句で始まる、この『学問のすゝめ』の筆を執らしめた原因でもあれば、理由でもあった次第。その意味において、もともと「対話」とは私たちの国で、まさしく「学問」の同義語であったことにもなるであろうし、その際の「学問」が「福澤愛用の熟字」（小泉信三）である「実学」であったことも、やはり忘れられてはならない点であろう。ただし、その際の「実学」を例えば『広辞苑』の語釈を借りて、単に「習った知識や技術が空理・空論でない、実践の学。実利の学」と捉えるのは、いささか早計ではなかったであろうか。

この点について、もう少し『学問のすゝめ』の「解題」から、小泉信三（こいずみ・しんぞう）の説明を補っておくと、そもそも「実学は、いわば虚学に対するものであるが、福澤が虚学視したのは在来の漢儒の学で、実学の実は儒学の思弁的なるに対する実証的の実、また〔、〕その浮文的なるに対する実用的の實を意味するものであった」と述べられている。したがって、これは前掲の『広辞苑』の「実学」の第二の語釈——「実際に役立つ学問。応用を旨（むね）とする科学。法律学・医学・経済学・工学の類」とも、そのまま重なり合う訳ではない。論より証拠、このような「実学」を「実学」と呼ぶ以前、福澤諭吉は「文

学」と称していたのであり、その限りにおいて、決して「実学」と「文学」は相互に排斥する関係にあるのではなく、むしろ「文学」の、ある面を彼は否定し、これを「虚学」と捉え、逆に「文学」の、ある面を彼は「実学」として肯定していたことになる。

そして、その内の後者が、本稿における「対話」という行為でもあれば、そこに福澤諭吉は「談話」という語を宛がっていたのでもある。もちろん、この二つの語を素朴に、そのまま同定するのは間違っているし、主として「談話」が私たちの国では conversation の翻訳語や、あるいは discourse の翻訳語として用いられてきたことは、それ自体、その歴史を繙く必要があるであろう。が、それにも拘らず、これらが「必ずしも人と共にせざるを得ず」という点で、共通の性格を有していることは疑いがなく、その点において、福澤諭吉は「談話」を「演説」と並べ、これらを「学問の要」である「活用」として、また「学問の本趣意」である「精神の働き」として、次のように述べていたのであった。——「書を読まざるべからず、書を著さざるべからず、人と談話せざるべからず、人に向かって言を述べざるべからず、この諸件の術を用い尽して始めて学問を勉強する人と言うべし」。

◆42

5

ところで、本稿が先刻来、転換期（ターニング・ポイント）という語を使っているのには理由がある。もちろん、この語自体は「物事の〔、〕うつりかわる時期。変遷する時期」（『日本国語大辞典』）を一般に意味しているから、それが私たち、一人一人の身の上や身の回りに、さまざまな形で姿を見せることは論うまでもない。けれども、そのような個人的な転換期と、それが日本史上、あるいは世界史上に生じる場合とでは、その間に、やはり大きな開きがあるし、そのような開きが介在することで、結果的に転換期の以前と以後とでは、私たちの生活に劇的な変化が出来し、そのことに伴い、私たちの価値観は真偽の面でも、善悪の面でも美醜の面でも、ことごとく様相を違え、そこから逆に、むしろ私たちが「対話」を必要とする場面に際し、その「対話」の余地すら見出しえない、困った事態を招来し、ある種の「コミュニケーション不全」を惹き起こしかねないことになる。

もっとも、このような事態は通常、数十年単位の射程を有しているし、時には、それ以上の、数百年単位の射程すら、そこに抱え込んでいるから、その到達

距離は一人一人の、個人の生涯を超えているケースが多い。と言うことは、このような「コミュニケーション不全」は個人（individual＝非分割態）の経験であるよりも、むしろ世代（ジェネレーション）の経験でもあり、それを代表するのが親子や兄弟や、要は家族であったり、あるいは、そのような家族の集合体でもある、社会や世界であったりする訳である。おまけに、このような状態を単独の個人が、最初から最後まで、ことごとく見通すことは叶わない以上、そこには新しい、別の「コミュニケーション不全」が付け加わり、これが上乘せをされることも度々であり、そのことによって、とりかえしの付かない暴力や破壊行動へと、このような言語不通の状態が、なだれこんでいくことも歴史の証言する通りであった。

ちなみに、このようにして福澤諭吉が『学問のすゝめ』で論じていることは、一口で言えば、私たちの国が江戸時代を通じ、いわゆる儒学（→宋学）を官学とし、これを官吏登用の学として御用学化をしたことから齎される、必然の結果であって、もともと朱子学が「御用学者」（a scholar under the government's thumb）となるための学問体系であった訳では、さらさら無い。が、御多分に漏れず、どのような学問も試験制度の中へと組み込まれ、これが受験教科となるに及んで、そこに姿を見せるのは付和雷同を旨とする、その名の通りの「御多分連」でしかなく、このような連中に福澤諭吉の説くような、前掲の提言ほど無駄なものはない、と評しても構わないであろう。——「恐れ憚るところなく、心事を丸出して颯々と応接すべし。故に交わりを広くするの要は〔、〕この心事を成る丈け沢山にして、多芸多能〔、〕一色に偏せず、様々の方向に由って人に接するに在り」。

43♦

と、このような「多芸多能〔、〕一色に偏せず、様々の方向に由って人に接する」態度（attitude→aptitude）のことを、本稿では「教養」と呼び、また「対話」と称しているが、それは一種、人間の能力（aptitudo）でもあれば、文字どおりの習性や適性でもあって、その分、そこには個人の向き、不向きが問われざるをえない。が、それにも拘らず、それは私たちの心構えや身構えや、要は姿勢の問題であることも確かであって、であるから、これまた先刻来、福澤諭吉は「人にして人を毛嫌いするなかれ」と諭し、あるいは昨今、ようやく私たちが「アクティヴ・ラーニング」という名の、いたって稚拙なカタカナ表記で置き換えているような、あの自主的で能動的な学習を、とっくの昔に「学問を勉強する人」の必須の「術」として提起していた次第。——「書を読まざるべからず、書を著さざるべからず、人と談話せざるべからず、人に向かって言を述べざるべからず」。

らず……」

裏を返せば、それまで私たちの国の学問は、福澤諭吉の言う所の「実学」ではなく、もっぱら「読書」の学に過ぎず、そこでは専ら、ただ書（＝書物）を読むことばかりが行なわれ、これが繰り返されてきた感が強い。したがって、それが和学（→日本学）であれ漢学（→中国学）であれ、ひいては洋学（→西洋学）であれ、いずれも「読書」の学であることに変わりはなく、ひたすら私たちは和書や漢書や洋書を読み、とにかく書を読むことに心血を注いできた訳である。そして、そのことによって世間の、いわゆる「学者」の相当数には、書物が失われれば知識の、すべてが消え、書物を手許に置かなければ何一つ、頭を働かすことの出来ない状態が生じている、と福澤諭吉は揶揄しているが、そのような状態は昨今、はたして「パソコン」（personal computer）好きの「学者」によって克服され、とっくの昔に笑い話になっている、と私たちは安閑としていられるのだろうか。

◆44

視察、推究、読書は〔、〕もって智見を集め、談話は〔、〕もって智見を交易し、著書演説は〔、〕もって智見を散ずるの術なり。然（しか）り而（しこ）うして〔、〕この諸術の中に、或いは一人の私（わたくし）をもって〔、〕能（よく）すべきものありと雖（いえ）ども、談話と演説とに至っては必ずしも人と共にせざるを得ず。〔中略〕然るに学問の道において談話〔、〕演説の大切なるは既に明白にして、今日これを実に行う者なきは何ぞや。学者の懶惰（らんだ）と言うべし。人間（じんかん）の事には内外両様の別ありて、両（ふたつ）ながら〔、〕これを勉めざるべからず。今の学者は内の一方に身を委（まか）して外の務めを知らざる者多し。これを思わざるべからず。私（わたくし）に深沈なるは淵の如く、人に接して活潑なるは飛鳥の如く、その密なるや内なきが如く、その豪大なるや外なきが如くして、始めて真の学者と称すべきなり。